

Captured Live

Rufus Wainwright
イラストレーション=竹田真文



『Celebration Tokyo 2013』 3月1日 青山C/O

新しい曲を作った何年かステージで演奏し、録音す。そして一旦録音した曲は一度とステージでは演奏しない。94年、レゴスでアラ・クテイにインタビューをした時、そう語っていた。常に観客にステージに注目してもらいたい。自分自身新しい曲を作るプレッシャーを身を守るためだけに。そして、その3年後に彼は亡くなった。

そんな理由から、晩年、彼がレナ・イン(フエラが経営していたナイトクラブ)で演奏していた曲の数々は録音されていない。なんぞの幻の名曲をキングダム・アフロックスと決まらずに再現するとい。写真集の酒井さんのアイデアらしい。まず、キングダム・アフロックスが登場。アフロビートの看板を掲げ、今、注目の若手バンド。彼らのオリジナル曲は、フエラのレコード未収録曲の「Chop and

Clean Mouth」が始まった。パワカッションの種にも、人数も圧倒的に多いのに、しっかりとオリジナルのアルバムを聴いていて驚いた。もつとホーン・セクションをラフにしたら、フエラっぽさが出たかもしれないけど、そこは彼らなりの解釈なのだろう。



キングダム☆アフロックス(写真=各務美紀)

そして、決まらず。しょっぱなのMCで「俺も、日本人だから本物のフエラじゃない出来たこと!」といつらりの開き直り宣言。曲目は「Sister Brother Of Perambulator」(Big Blind Country Music Against Second Step)」の順で、曲。ツッパラムスにしたり、フエラのリズム・セクションを持つポリリズムが鮮明に浮かび上がる。今まで、少々がっかりしたが、会場はそんな

ことに全く関係ない感。上がりをみせた。フエラながら上半身裸になったフエラのカラセジオムトウとワディファンクが、ぼんぼんにあって観客を煽る。セルジウがフエラの一代記を日本語にして歌詞に乗せたのはユニークだ。アフロビートを説明。テクニカルな点はキングダム・アフロックスの慣れた感じに及ばなかったけれど、決まらずに全体が持つ一種の滑

稽やおやおらかなエンターテインメント性こそ、フエラの音楽の中にあるワウカ的な要素とリンクしている

るように思え、彼の解釈において納得。今年はまた、フエラ関係のイベントが続くらしい。各務美紀

エグベルト&アレキサンドレ・ジズモンチ

3月7日 東京シアターオクト

2本のアカousticロック。ギターの前には、確かにマイクが立っている。しかし、どう耳を凝らしても、スピーカーから出ている音には聞こえない。ステージの真上からおよそ180度、一切のPAを通さずに、たまたま繊細な音が広がっている。見た目にだけマクナシのピアノ、ソロの時は、ステージの上から3メートルの音が広がっていき、感覚がある。そのリリカルな楽器の響きが、エグベルト・ジズモンチの今の表現に鮮然と獲得力を補って行くのだ。この夜の会場の音響の素晴らしさに、僕はすっかり酔わされてしまった。

近年のエグベルトの来日公演は、彼のソロ、もしくはオーケストラとの共演で行なわれていた。それに対して今回は、09年の最新作「サウダソウニス」で共演していた息子アレキサンドレ・ジズモンチとの共演。アルバムでのデュオは07年3月の録音だから、そこから6年分の

成熟がしつかりと聴かれた。親子のギター・デュオ、アレキサンドリのギター・ソロ、エグベルトのギター・ソロ、エグベルトのピアノ・ソロ、エグベルトのピアノとアレキサンドリのギターとのデュオ、アレキサンドレ・ジズモンチは、アレイのスタイルは父とよく似ているが、出ている音は完全にフレッシュ。父のオーガがアマゾンの大河だとすると、息子のギターは、その源流の源流、まるで岩から染み出る湧き水のように聞こえる。「サウダソウニス」という共演は一切ピアノが音場しなかったから、エグベルトのピアノにアレキサンドリのギターというデュオ聴かれたのは貴重な体験も思った。

流中の休憩を除いて2時間、軽やかにして濃密なコンサートのはやりは、やはりエグベルトのピアノ・ソロだ。その3曲の中でも「バイアオン・ソンドロ」での1音1音

に注ぐ集聚力は凄まじく、現在のエグベルトのピアノ・ソロのアルバム

サナンダ・マイトレーヤ&サナジ・ナジ

3月21日 青山C/O



写真=佐藤拓夫

日本でのライブは実に18年ぶり。87年にテレンス・トレント・ダービーの名で、鮮然とデビューを飾ったサナンダ・マイトレーヤが「ナジ・ナジ」と名づけた二人のリズム隊を引き連れてステージに上がった。近頃は自身の音楽を「ポスト・ミレニウム・ロック」と呼び、シリアスとアグレッシブなサウンドを展開しているサナンダ。ギターやピアノを弾きながら披露された楽曲は、新作に取められたものばかり。テレビ時代の曲には、切目をくずれ、最新の音を存分に聴かせられた。

伸びやかに膨らみ深いメロディ。仲間にも満たないオーケストラ。やや強引に、ガナるよりにして張りを上げる声は以前と変わらなく、ソノルで、両手をグイグイ引きまくっていく。デビュー10年か自身の音楽がカチゴライズされることを極端に嫌って

いた彼らからも、ソウクとソウルをベイスとしながらも、そのどちらにも偏っていない音楽は、まさに「ポスト・ミレニウム・ロック」と呼ぶにふさわしいものに感じられて。決して新しくはなれない音楽ではないが、サナンダ独特のウォーカルが明快な